

フレージング練習を重視した口頭表現の授業

An Oral Exercise Focused On Phrasing Practice

木原郁子+・太田ミユキ+・棚橋明美+・中川千恵子++

KIHARA Ikuko・OTA Miyuki・TANAHASHI Akemi・NAKAGAWA Chieko

+聖学院大学・++早稲田大学

+Seigakuin University・++Waseda University,

+〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1-1・++〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

E-mail i_kihara@seigakuin-univ.ac.jp, miyuki0102@hotmail.com, a_tanahashi@seigakuin-univ.ac.jp, hana@k06.itscom.net

Abstract: The goal of the “research/presentation” class for collage bound JFL learners is to enhance presentation skills because of the needs of such skills in university classes. This lesson plan not only addresses on issues how to teach the content of students’ presentation, but their phonological skills. This lesson also examines classroom instructions employed “the prosody method focused on *he* intonation” (Nakagawa 2001) through phrasing exercises. This study reports the results of lessons focusing on pronunciation, especially sentence intonation, which may improve learners’ presentation skills and promotes such pronunciation practices.

キーワード：口頭表現、発表、フレージング練習、「へ」の字、区切り

1. はじめに

当発表では、学部留学生対象の「調査・発表」という授業で行なった口頭表現能力を高めるための工夫を報告する。口頭発表の授業においては、内容面は重視されるが¹⁾音声面の学習は課題となっている。当授業では、「学習者の表現能力は、発音（特に文イントネーション）の意識化によって向上していくのではないかと考えて、中川（2001）の「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導方法」を導入し、フレージング練習を取り入れた指導を試みた。その授業のプロセスと、授業を通して学習者が音声面をどのように意識化しているかを内省記録から報告する。

2. 学習者と授業概要

対象としたクラスは、レベル1²⁾で、3クラスあり、担当者は3名である。学習者は男13名、女16名、計29名で、出身地は、中国・韓国・ベトナム・ネパール・ベナンである。

授業は、「調査・発表」の主たる内容である課題発表と発音練習を並行して行なった。課題は3つでタイトルは、「私の国の○○」、「日本の○○」、「旅行に行くなら○○」である。

表-1 授業内容

| 回 | 内容 | 発音練習 |
|----|----------------|----------------------|
| 1 | 発表 1-1 導入 | U7 「私の国のいちばん」 |
| 2 | 図書館ツアー | |
| 3 | 【課題発表1】 | U7 「私の国のいちばん」 |
| 4 | 発表 2-1 導入 | U6 「上手ですね」 |
| 5 | 発表 2-2 資料集め | U8 「私の趣味・好きなこと」 |
| 6 | 発表 2-3 資料まとめ指示 | 【小発表1】 U13 「思い出の手袋」 |
| 7 | 発表 2-4 原稿作成 | U12 「食べたことがありますか」 |
| 8 | 発表 2-5 練習 | U14 「ガイドになろう」 |
| 9 | 【課題発表2】 | |
| 10 | 発表 3-1 導入 | |
| 11 | 発表 3-2 資料集め | U15 「百万円あたらたら」 |
| 12 | 発表 3-3 資料まとめ指示 | 【小発表2】 U17 「夢の国を作ろう」 |
| 13 | 発表 3-4 原稿作成 | |
| 14 | 発表 3-5 発表の練習 | U7 「私の国のいちばん」 |
| 15 | 【課題発表3】 振り返り | |

音声面の教科書として、『にほんご発音アクティビティ』（中川千恵子他著 アスク 2010）

を使用し、10分～15分程度のフレージング練習8回とその内の2回は小発表を行なった(表-1)。小発表では、各ユニットで練習後、各自原稿を作成し発表する方法³⁾を取った。また、課題発表と小発表の計5回では、発表を録音し、他者評価と自己評価を行なった。コース終了時には、振り返りシートで内省をした。

3. 各シートの回答結果と分析

3.1 他者評価シート・自己評価シート

発表時の他者評価シートは、大きく2つに分かれており、発表や態度(アイコンタクト、下を向いて読んでいる等)と内容(良い内容、面白い、アピールした等)である。前者についてのコメントには、「への字も頑張りました」、「への字を上手に使ったら上手になると思う」、「間を取るのがいいです」、「間を取るのが良くない」などがあつたが、少数であつた。

自己評価シートは、内容・発表の仕方についての反省・今後の発表の時の改善点・その他の内容で、「声を大きくして、声の抑揚や間合いに変化をつけたい」、「発表はへの字に問題がある」、「フレーズを忘れないようにしたい」、「への字があまり使えない」などがみられた。

3.2 振り返りシート

「への字のイントネーションや区切りをつけて発音練習をしたことについてどう思うか」という質問のコメントでは、「外国人だから、日本人のようにはっきり発表することができない。ゆっくり話すと同時に「へ」の字を使って区切りをつけて発音練習する必要がある」、「自分で準備する時注意していますが、発表の時は多分注意していないと思います」などがあつた。毎回の発音練習については、「おもしろいです」、「区切りを入れるように意識していました」、「練習して発音すると口が硬くなくて、普通の会話と同じようです」、「よく練習した時は発表する時いいです。でもよくない練習した後は発表の時よくないです」などのコメントがあつた。

また、発表時に気をつけたことに関して12項目の中から複数回答で選ぶ質問では、多かつ

たものから順に、1「声の大きさ」、2「発表前に練習する」、3「漢字の正しい読み方」・「アイコンタクト」、5「早くならないように」、6「原稿をきちんと準備する」、7「姿勢を正しくする」・「区切りを入れる」、9「への字のイントネーション」となつた。全体の割合でみると、「発表前に練習する」と「原稿をきちんと準備する」の発表準備関連は22%、「アイコンタクト」と「姿勢を正しくする」の発表の態度関連は20%であるが、フレージング練習で重視した「区切りをつける」と「への字のイントネーション」は、全体の12%であつた。

3.3 分析

発音練習で原稿を作り発表する場合、各自の原稿は比較的平易であり、授業内で口頭練習の時間もあるので、区切りやへの字に意識を向けることができる。一方、課題発表は、原稿の内容の難度が上がり、新出の語彙や表現も増えるため、漢字の読み方や長音・促音などへの注意が必要になり、区切りとへの字のイントネーションにまで配慮が及ばなくなっていると考えられる。

4. おわりに

今後の授業の取り組みとしては、フレージング練習時や発表の口頭練習時により意識化を図ること、学習者個人での口頭練習を促すこと、また、効率的な練習の指示の工夫など授業内容の再考も必要である。

注

注1 岡田(2007)は、取り組みを報告している。

注2 プレースメントで3段階に分けた一番下のクラス。

注3 川口(2005)の「個人化」を援用した。

参考文献

岡田久美(2007)「上級の口頭表現能力を高めるために—発表の課題と支援について—」『南山大学国際教育センター紀要』第8号, pp.47-59

川口義一(2005)「表現教育への道程—「語る表現」はいかにして生まれたか—」『講座日本語教育』第41分冊, pp.1-17, 早稲田大学日本語教育センター,

中川千恵子(2001)「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導の試み」『日本語教育』第110号, pp.140-149